

銀塩からデジタルへ

▼世の中、すでに銀塩からデジタルに変わってしまった。これはカメラの話である。銀塩カメラとはフィルムカメラのことで、フィルムなど感光剤に銀塩（ハロゲン化銀）が塗られていることからこう呼ばれている。

▼考古学の世界ではカメラは必需品である。写真は実測図では表現できない遺跡の俯瞰や遺物の色合いや質感、立体感などを表現してくれる。遺跡や遺物を撮った写真そのものが「文化財」とも言われている。それだけ明瞭で精緻な写真が要求されるため、解像度が非常に高く情報量が多く得られる大判カメラや中判カメラが使われてきた。フィルムサイズは 35mm フィルムに比べると 5 倍から 15 倍近く大きい。

▼考古学では最近まで銀塩カメラが主流であった。デジタルカメラは銀塩カメラに比べ、画質が劣り、安易に加工が可能な上、データを保存する媒体の安全性にも不安があった。銀塩カメラの画質に追いつくには、中判カメラのフィルムと同等以上の解像度が確保できる短辺 4,000 ピクセル以上が必要だと言われていた。

しかし、近年、デジタルカメラの解像度もフィルムと同等以上になり、デジタルの活用法についても様々な検討がなされてきたことから、考古学でもデジタル一眼レフカメラが主流となってきた。

▼遺物撮影でも遠近による被写体のゆがみを補正できるあおり撮影が可能な蛇腹機能を持つ大判カメラが使われてきたが、こちらもデジタル化が進んでいる。7月15日（土）から開催の特別展「日向諸県君と葛城氏」では奈良や大阪から借用した資料も多く、当館の職員が撮影した船形埴輪など写真も図録に掲載している。ライティングやレイアウトなどに注意を払い、質感や模様など遺物が持っているデータを写真に表現している。2435 万画素の

FX フォーマットデジタル一眼レフカメラで撮影した写真である。是非、出来映えを見てほしい。

（永友良典）



大判(左)、中判(上)、35mm(右下)のフィルムサイズ



遺物の撮影風景